淨瑠璃を扱つた大阪落語の味

林　龍男

往年大阪の一般民衆が、情操的な義太夫淨瑠璃を藝術的にも娯樂的にも如何に愛したかそれが日常生活にまでも影響をして居たかを當時の生活や世俗を語る大阪落語を通じて覗いて見るのも面白いと思ふ。いま思ひ出すままに記して見ると、大阪落語に扱はれた義太夫淨瑠璃(芝居ばなしを除いて)は數種に數へられる。これを性質別に分けて見ると其の一淨瑠璃を落語の中心とするもの。其の二、淨瑠璃を落語のサゲに扱つたもの。其の三、落語中に一部淨瑠璃を應用したるもの、右の三つに分ける事が出來る。中心とするものに「淨瑠璃息子」「二八淨瑠璃」「豐竹屋」なる小ばなしの程度のものに少し長くなつては「雪こかし」「軒付」長いものでは「寢床」「猫忠」「後家殺し」があり落ゲに扱はれたものに「胴亂の宰助」「片袖」なぞ落語中に見るものとしては「猿まわし」「掛取り」「紙屑屋」等是らは實に大阪色の尤も濃いものと云ひ得るであらう。「淨瑠璃息子」はその題名の如く淨瑠璃好きな商家の息子を描寫した主として若手の落語家によつて演ぜられる。女性むきの落語とでも云へよう。筋は大體察しらる通り、毎晩夜更け淨瑠璃の稽古から歸る倅に、父親は立腹して表戸を開けない。倅は開けて呉れと哀願する。落語の常識通りな手法ではあるが、それに扱はれた淨瑠璃の文句を順序によつて掲げて見ると

(合邦のお辻)倅へかゝさん此所開けてたべ辻で御座んす(節)

父「やかましいわい毎晩々々妙な聲を出しくさつて

(安達原の袖萩)倅へ戸を叩くにも叩かれず不孝の罪(節)

父「その通りじゃ何所へなりと出て行け

(安達原袖萩)倅へ此垣一重が黒金の、門より高う心から泣く聲さへも憚かりて……(節)

此悲鳴を聞き付けて警官がやつて來ると云ふ落語調に成りて警官の仲裁で息子は家内に入る事を許される

父「お隣りの半七さんはもうとうに寢て居られるのに何時までも夜遲うまで

(酒屋のおその)倅へいまごろは、半七さん何所にどうして御座らうやら……(節)

父「これや、わしの云ふ事が耳に這入らんのか

(堀川のお俊)倅へそりやきこゑませぬ傳兵衛さん(節)

父「無理やとでも思ふのか

(同)倅へお言葉無理とは思はねど(節)

父「困つた者じやなア、これでは末が案じられるな

(同)倅へ末の末まで言ひ交はし(節)

父「御近所へ少しは遠慮したらどうや

(同)倅へ何の遠慮もないしようの(節)

父「何時までも親に世話燒かしくさつて

(同)倅へ世話しられても愚にきぬ(節)

父「掛合じやがな、親にこれだけ劍突を喰ふても何とも無いのか

伴「何ともおまへん床へ出たら何日も槍喰ひどうしです

と落げて居る。この落語は音曲ばなしに類似して居ると云つた方が正しいかも知れない

その全體が淨瑠璃を語つて居るのであるから筋としてはアマイものである。演者は主に青年とされて居たようである。次の「二八淨瑠璃」も同格のものであつて、是れには忠臣蔵六ツ目が扱はれて居る。忠六を習つて明日を會の當日に控へながらどうしてもうまく行かないので困つて居る若旦那がある。問題の箇所は

「夜前、彌五郎どのに御目にかゝり、別れて歸る暗まぎれ山越す、とまで來るとその後の猪がどうしても出ない。思ひ惱んで道々も繰返し淩へながら歩いて居ると、何時もお出入りの街太鼓の和吉が後からその體いを見て呼びとめ樣子を聽いて見ると、猪がスラ〳〵と出ないとの事、そこで一策を案じ當日前で聽ていて「別れて歸る暗まぎれ山越す、となつたら前から十六！と聲をかける、その時九々の聲を胸算用をして、十六なら四四の十六と勘定して四四は猪と思ひ出してはどうかと教へられ、是れは名案なりと若旦那大いに喜び、二三度試演の結果もう大丈夫と、當日は和吉も早くより場の前の所に陣取つて、六ツ目の來るをいまやおそしと待構へて居る、五段目もすんで愈六段目となり、さて問題の

「夜前彌五郎どのに御目にかゝり　別れて歸る暗まぎれ山越す……とまで來たのであるが、何とも聲がかゝらないオヤと思つた若旦那間が抜けてはまづいと思つたので直ぐに繰返して、また「夜前彌五郎どのにお目にかゝり、別れて歸る暗まぎれ山越す……となつたが聲も無ければ猪も出ない。こんどは「山越す……と聲張り上げたが依然として音無くすると前の聽衆からは「オイ〳〵山を三つを越したら足がくたびれるぜ」なぞと惡落が來る。若旦那も半泣きになつて、また「山越す……と叫んだが和吉の聲は何所からもせない、然し和吉は早くから場の前の處に來て居たのであるけれども、丁度五段目の中程から急に腹痛をもやうし出したので、便所へ立つたそのうちに、運命的と云はうか「山越す…か來て仕舞つた、便所の中で聽衆のワツトと云ふ聲を聞いて驚いて横ツとびに駈けて來て場の後から「十六ツ……」と聲を掛けた、若旦那も助けの神との思ひで聲をかぎりに

「二八に出合イ……」と落げる。この咄のヤマは頼まれてゐた男が便所に這入つてゐたと云ふ事であるが、大阪落語にはやゝもすれば尾籠に渡る點が多いとの非難が高い。だがこれを他の筋に替へては、これほどまでに盛上つて來ない、大阪は野卑な内容を喜ぶとて常に嘲笑されたことであつた。内容をサラリとして落げに重點を置いた、江戸落語に比べて大阪は總てが興行的である。江戸の蒲燒と大阪の鰻丼との違ひで、味覺の目的も違へば風土の相違でもあらう、職人的な江戸ッ子と商人氣質の大阪人とでは自ずと違ふ、今日では關東關西共に地方色に塗り潰されて雙方の特色は全くなくなつた。江戸落語が圓朝歿後行詰りを生じてか、明治三十五六年の頃より（三代目）小さん、圓右、圓遊、圓生、（いづれも故人）三代目圓馬、八代目文治、以上の諸氏によつて、大阪落語が東京化された事は東京人に對して耳新らしさ、落語的な滑稽味の豊富さからである。その數々を擧げたものに渡邊均先生の近著「落語の研究」を一讀されたい、右の「淨瑠璃息子」も八代目文治氏が「義太夫息子」として演じられて居られるが、義太夫と云ふよりも清元、常磐津、の感があ

つて義太夫には少し縁が遠いと云へるであらう後で述べる「猫忠」「後家殺し」「胴亂の幸助」も東京化されて居るものであるが、何としても無理があつて絶對大阪調のものであると云つて憚らない。大阪落語を尾籠で野卑との非難は判るか、江戸にも「芋俵」「てんしき」等の咄もある最近に東京化された「馬の糞」の如きもある様うに、一概に大阪落語を尾籠、野卑、と難ずるのは、大阪研究の足りない江戸人の好意無き觀察であつたらう。「馬の糞」が東京化されようなどは「王子の狐」以上のものであり、尤も皮肉な現象と云はねばなるまい。つぎの「豊竹屋」は江戸人と大阪人とを對照してよくそのきもちを現はして居る。その筋は、こゝに何にを見ても淨瑠璃にして語るので、人呼んで豊竹屋節右衛門と云ふ、今日も二十五日のこととて、天滿の天神さんへ參詣したところが、賽口をそのまゝ賽錢箱へ投げ込で仕舞ひ、透腹をかゝへて歸る道々にも淨瑠璃で

上るり(節)「こちらを見れば鯉芋屋、あちらを見れば壽司屋店、一つ喰ひたい〳〵と思ふ心の切なさを推量してたべ往來の人……」

などと目に付くものを何からでも淨瑠璃に語り乍ら家に歸つて來て、一人でチビ〳〵と一杯飲んで居るところへ、戸外から這入つて來た一人の男、唐桟の羽織に吉原下駄と云ふ粋な風采をした男が

「御免なさいまし、豊竹屋節右衛門さんはお宅でございましようか」

と訪ねて來た、その男は江戸三味線堀三筋町に住むかりん屋胴八とて口三味線の達者とある、節右衛門の噂を聞いて一度合してもらひたいと云つて來た

胴「私はどんなものでも、口三味線に合します」

節「私は又どんなものでも淨瑠璃に語ります」

胴「まア貴郎からおやりなすつて……」

節「まア、あんたからやりなはれ……」

胴「まア、おやりなすつて……」

節「まア、やりなはれ、やり、やり、やり、槍につけても思ひ出す(節)脇坂様の槍の鞘、とはどうです……」

胴(口三味)「テン、テン、テンの皮とはどうでしよう……」

節「あ、なるほど」

胴「合ひますね」

節「合ひます膾のケンに使ふのは(節)」

胴「キンカン、キンカン(口三味)」

節「去年の秋から丸一年、二年越しにも拂ひもせず米屋と酒屋に、せがアまれて(節)」

胴「テン、テン、テンテコマイ(口三味)」

節「襦袢のようで襦袢でなし、羽織のようで羽織でない(節)」

胴「ハンテンハンテン(袢天)(口三味)」

節「蜜柑の皮の乾たのは(節)」

胴「チンピ、(陳皮)(口三味)」

節「佛間に向ひ鉦たゝき(節)」

胴「カンキン、カンキン(口三味)」

節「紙屑(節)」

胴「テーンー(口三味)」

節「成ほど面白いなア、まア一杯飲みなはれ」

と二人で盃を交して居ると、向ふの神棚に供へてあるお饒餅の上に、ねづみが三疋、また三疋、それを見た節右衛門

節「あれ〳〵向ふの神棚に、ねづみが三チュ出でゝ、また三チュ出でゝ、六チュまじくウー…(節)」するとねづみが此方向いて

「チュウ、チュチュ〳〵〳〵」是を見た胴八

胴「流石に節右衛門さんところのねづみだけあつて旨まく彈きますね……」

節「いゝゑ、ほんのかぢるだけです」

この落げ聞くにつけ江戸人と大阪人がよく出て居ると何時も思ふ事である。以上は小ばなしの紹介程度であつた、後は次回に讓るとして一先づ打切る事とす。